

# 化学療法後の吐き気の程度と食事摂取状況の実態

## ～サッパリ食の現状と今後の検討～

キーワード：化学療法，食事，悪心，嘔吐。

国家公務員共済組合連合会 佐世保共済病院

○松田法子 古川紀世子 赤坂直美 光武純子 前田生子

はじめに

A 病院では化学療法後の食欲低下時において食欲改善が出来るように工夫した治療食(以後サッパリ食)を作成している。A病院の産婦人科病棟では化学療法のために入院する患者が月に約20名である。しかし一度サッパリ食を食べた患者は、再度サッパリ食を選択することが少なく、食欲低下時は、持ち込み食で対応される傾向にある。そのため、患者が好む持ち込み食を把握することで、今後のサッパリ食の検討に役立てたいと考えた。その結果、治療後2日から3日に吐き気のスコアの上昇がみられ、それに伴い食事摂取量の減少が見られた。患者の間食から摂取可能な経口食の系統が分かった。この結果をもとに今後、サッパリ食の検討に役立てる事ができたので報告する。

### I 研究目的

化学療法を受ける患者の吐き気出現時期、吐き気のスコアと摂取できる食べ物を把握し、今後のサッパリ食の検討につなげる。

### II 研究方法

1 対象：平成22年2月から平成22年4月までに化学療法で産婦人科病棟に入院した患者19名

2 研究期間：平成21年10月から平成22年9月

### 3 方法

1) 対象者に入院日から退院日までの毎食時①食事摂取状況(0から10割)②吐き気のスコア(0ない、1少しある、2ある、3強くある)の4段階で評価③持ち込み食の摂取状況の実態調査を行った。

2) 退院時に食事についての質問紙調査を行った。

4 倫理的配慮:研究の主旨を説明し、研究結果は本研究以外には使用しないことを文章で約束し同意を得、質問紙は無記名とした。本研究は看護部倫理委員会の承認を得た。

### III 結果

回収率は100%(19名)。TC療法を受けた患者は15名、CDDP-CPT-11療法を受けた患者3名、PI療法を受けた患者1名であった。吐き気のスコアと食事摂取量と間食の割合を見てみると、治療2日目より平均スコアは1.8と軽度上昇し、それに伴い食事摂取量は6割前後と低下が見られた。スコア上昇時の間食の割合は、果物35%、飲料水34%、お菓子24%の順に多く果物の割合は全病日にわたり多かった。また吐き気のスコア②③の患者の食事摂取量と間食の割合について見てみると、治療2日目に吐き気の平均スコアは1.5と最高値を示し、食事摂取量は3.4割と減少している。スコア平均の最高時の間食の割合は果物・飲料水27%、お菓子20%の順に多い。食事についての退院前アンケート結果については、吐き気出現時、サッパリ食への変更の割合は全体の47%を占め、53%の人は常食を希望された。常食がサッパリ食より6%

上回る結果となったが、サッパリ食のリポート率は33%と低い。

### IV 考察

実態調査の結果、吐き気が上昇するのは治療後3日目から4日目であった。また、吐き気の上昇とともに食事摂取量が減少し、病院食以外の果物や飲料水・お菓子などの間食で栄養摂取を補っている傾向にあることが分かった。果物や飲料水などの摂取が増加していることは、果物は吐き気を誘発する臭気がなく、冷やす事で口当たりがよくなり、味覚障害で舌に違和感があるときでもサッパリ感をもたらす、摂取しやすいためと考える。Rhodes<sup>1)</sup>は、「化学療法は味覚に影響を及ぼすばかりでなく、触覚・臭覚および視覚などの感覚にも影響を与えている」と述べている。そのため、サッパリ食を見直すにあたり、吐き気が増強している時期に、臭気がなくさっぱりとした感触が味わえる果物を更に追加することは、食欲不振の軽減及び食事摂取量の増加に有効であると考ええる。

現在の食事選択状況は、吐き気がある時期でもサッパリ食より常食を摂取している患者が多く、また一度サッパリ食を食べてもリポート率が低い事が明らかになった。この結果から現在のサッパリ食は、①おかずが常食に比べて量が少ない。②味が薄いことから選択されにくい状況であった。神田ら<sup>2)</sup>の報告によると、「治療中の方が治療後より味覚の変化の頻度が高く治療中は化学療法剤により味細胞が障害されている時期であり変化を敏感に受け取っている。」と述べている。A病院のサッパリ食は、常食より0.06%塩分を増加しているにも関わらず「味が薄い」と敬遠されることがわかった。そのため、今後のサッパリ食の改善策として、①おかずの品目を増やす、②一品味のしっかりついたおかずの追加、③サイドメニューとして口当たりのよい野菜スティックや果物の盛り合わせなどを提供し、食事満足度を上げるように給食課と検討し改善していく必要がある。また、心理的背景として患者は、治療後吐き気の恐怖があるため、看護師の役割として患者の脅迫観念を軽減させるためにも、補助療法としてのリラクゼーションなどの非薬物的介入に積極的に関わることが重要であると考ええる。今後の課題として、サッパリ食の改善と共に、患者の話を傾聴し、患者の精神的サポートを行っていく必要がある。

### V 結論

1. 吐き気の程度には個人差がある。
2. サッパリ食には①おかずの品目を増やす、②味の濃いおかずの追加、③野菜スティックや果物の盛り合わせなどサイドメニューの検討が必要である。

### 引用文献

- 1) Verna A. Rhodes: Cancer Nursing. 17(1)45-51, 1994
- 2) 神田清子: がん化学療法で変化する味覚にどう対応する, エキスパートナース, 16(10), P16-20. 2000